

2015年（平成27年） 2月 697号

私たちの永遠の命の恵みの代価

アダム・クジャク

2月18日の灰の水曜日から四旬節が始まりますので、「ロザリオの苦しみの奥義」から、イエスが私たちに永遠の命の恵みを与えられるために、どれほど苦しまれたかを想像してみましよう。

1. イエスはオリーブ山に行かれました。

ゲッセマネの園でイエスは、苦しみもだえながらも、最後まで御父のみ旨に従うことを決意されました。聖書の中で「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」と書かれています。イエスは未だ傷を受けなかったのに血と汗が顔から流れ出ました。この現象を理解できるでしょうか。

物凄い恐怖感で人間の顔の血管が張り裂ける現象です。アドレナリンというホルモンが血に出て血圧が高くなり、圧力で血管が破れ血と汗が一緒になって流れて出ます。イエスは金曜日の苦しみ方が分かったので、人間のように怖がりしました。しかし全人類を救いの計画を実践するために、想像を絶するほどの受難を受け取りました。

2. イエスは鞭打たれました。

兵士たちはイエスの手を低い杭に縛りつけました。ローマの鞭の紐の先には鋭い骨と釣り針と鉄の玉がついていました。鞭打たれた背中の皮膚を切って、筋肉、血管、神経組織を破り、張り裂けて、背骨まで見えるようになりました。そんな鞭で打たれた人はほとんど死に至りますが、イエスはそれでも生きておられました。

3. いばらの冠を編んでかぶせました。

冠はパレスチナの植物のいばらで造られています。枝に7センチぐらいの刺が付いています。この冠を棒で頭に押し付けられたのです。そのときのイエスの苦しみを想像してみてください。

4. イエスは十字架を担った時に三回倒れましたと聖書に書かれています。

十字架は丸太二本で建てられました。一本は（3mぐらい）垂直な丸太をゴルゴタという丘の上に立てられ、イエスは（1m50cmぐらい）、横の丸太を担っていました。手首がその丸太に結ばれていたため、イエスは倒れた時には頭が地面にたたきつけられました。

5. 十字架に付けられた主イエスは、御父のみ旨を果たして、息を引き取られ

ました。

旧約聖書の預言のように、イエスは私たちの罪を贖うためにいけにえとして、過越しの小羊のように屠られました。過越しの小羊の骨は折ってはならないと決められています。イエスの骨も折られていませんでした。イエスの十字架の両側にいた罪人の足の骨は折られ、イエスの足も折るつもりで、そばに兵士が寄ってきたが、すでに死んでおられたので、足を折られませんでした。十字架での亡くなる原因は窒息死でした。十字架にかけられると自分の重さで前かがみになるので、胸が圧迫されて苦しくなります。足でささえないと、窒息しそうになるので、十字架の上で足をのばしたり、かがんだりしているため、死を早めさせるためにすねを折っていました。でもイエスは死んでいたので、すねを折る代わりにわき腹、即ち心臓を槍で刺されました。そしてすぐ血と水が流れ出しました。カトリック教会のカテキズムによると人間を救うための秘跡の源となりました。

イエスは旧約聖書の預言どおり、過越しの小羊のように骨を折られずに、人間を救うために十字架の苦しみを担い、私たちの罪で殺されて、罪人に代わって裁きをうけてくださいました。四旬節の時には神がどのような代価を払われたか考えながら黙想しましょう。